

要旨

我が国では、政策および法制度の拡充により女性の活躍が推進され、女性のライフコース形成における選択肢が増えてきている。そのような社会状況において、女性たちは、自らの母親世代とは異なる生き方が可能になった。

本研究の主たる目的は、2000年代において家族形成を経験した女性がどのような生き方を見つけ、選択してきたのかを明らかにすることである。社会状況が変化の中で、女性たちのライフコース形成に変化が見られるか、また、どのような影響を受けているかを検討するために、母親世代と娘世代という異なる2つの世代を設定した。調査の結果、主に以下の3つのことが明らかになった。

第1に、母と娘との関係に関して、必ずしも娘は、母親からの影響を受けているわけではないことが示唆された。特に、職業選択において、娘世代は、母親の生き方を「参照」している程度であった。その要因として、娘世代では、社会状況や職場環境、ロールモデルの存在など、影響を与えるものが多様化していることが考えられた。

第2に、母親世代と比べて娘世代は、ライフコースの選択肢が多様化しているということが示された。1970年から1980年代にかけて家族形成を経験した母親世代では、専業主婦世帯が一般的であったが、2000年代以降に家族形成を経験した娘世代では、共働き世帯が一般化した。つまり、娘世代では、母親世代とは異なる社会環境において家族形成を経験しており、母親世代とは異なる生き方をすることが可能となったことが示された。

第3に、家事・育児に関して、女性のそれらを担う「意識」には変化が見られた。しかし、それらを担う「量」に大きな変化は見られなかった。専業主婦世帯が一般的であった母親世代では、家事・育児を「当たり前」として担っていたが、共働き世帯が一般的な娘世代では、「結果的」に担っていた。以上のことから、家事・育児に関して、母親と娘の世代間で完全に变化したわけではなく、むしろ、変化している途中であることが示唆された。なお、育児に関して、母親から子へ思いという点で、世代間での大きな変化は見られなかった。